博士論文要旨及び学位論文審査結果要旨

保健医療学研究科保健医療学専攻 博士後期課程　看護学分野 学籍番号：2176004 氏　　名：牧　千亜紀	学 位 授 与 年 月 日	令和４年３月 12 日
	博 士 論 文 受 理 年 月 日	令和３年 12 月７日
	論 文 審 査 終 了 年 月 日	令和４年２月 24 日

博士論文名	多発性硬化症病者が語る QOL ～社会生活を送るうえでのつながりに焦点を当てた実践理論の生成～

論文要旨

本研究は、近年、世界的規模で特に先進諸国を中心に有病率が増加し、若年女性での増加が著しく、日本もその例外ではない多発性硬化症（multiple sclerosis：以下 MS）病者の QOL 支援において、人や地域社会とのつながりに焦点をあてて、以下のように 3 段階にて調査を実施した結果をまとめたものである。

研究 1 は、2000 年 4 月から 2019 年 3 月までに発表された国内外の先行研究 30 本から、MS 病者の QOL の研究動向及び関連要因について明らかにした。その結果、MS 病者の QOL に関連する要因は、家族や友人など人間関係の変化、易疲労感、しびれ、抑うつなど他者に理解されにくい多彩な症状、再発の予測困難、就労状況や社会的役割の変化、医療関係者との関係性が示唆された。さらに、国内文献にはない QOL に影響を及ぼす要因として、認知機能、教育レベルやスティグマが示唆されていた。そして、個人差はあるものの喪失体験の中で折り合いをつけ、病気を持って生きる自身の人生の意味を見出すなど、自己や人生の再構築をしながら日々生活を送っている様相がみられた。

研究 2 は、地域で生活する MS 病者の QOL の実態を明らかにすることを目的に、病者自身が直接重み付けをして質的・量的に評価が可能な SEIQoL-DW（Schedule for the Evaluation of Individual Quality of Life-direct weighting）を用いて 33 名にインタビュー調査を実施した。さらに MS 病者の QOL の特徴をとらえるため、語りから QOL との関連を質的に検討した。その結果、SEIQoL-index の全体平均は、1 回目は 72.5±18.5、2 回目は 71.9±18.6 で、SEIQoL-index と発症年齢の間に有意な相関が認められた。MS 病者が療養生活において特に大切にしているものは、「人とのつながり」「家族」「仕事」で、特に人とのつながりにおいては個々人に合った「情緒的つながり」や「社会的つながり」を認識できることが QOL において重要な要素となっていた。また、SEIQoL-DW を用いながら語りを傾聴することで対象者は充足感が得られ、話すことで不安の軽減や気持ちの整理、自身の生活を見つめ直すきっかけとなっていた。

研究 3 は、MS 病者が自分に合った他者とのつながりを形成するプロセス、及び関連要素や潜在的ニーズを明らかにしていくことを目的に、MS 病者 33 名にインタビュー調査を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified-Grounded Theory Approach：M-GTA）の手法を用いて分析を行った。MS 病者が求めるつながりの実践理論は以下の通りである。MS 病者は、MS 専門医が【一次情報を語れる安心空間】となっていく一方、空間維持のために【遠慮がちなコミュニケーション】を取り始め専門医以外のつながりも求めていくが、【同病者と関わることへのアンビバレンス】な感情や【専門的支援への淡い期待】を抱いていた。重要他者には病気のことを【“言う・言わない”で自己防衛】し始め、【話さないという選択】行動を取るようになる。その後、経過の中で専門医や重要他者等との相互作用で自ら【病との葛藤を解き始め】【社会的マジョリティに同調】しながらも【自分スタイルのつながり再構築】を行うという過程を辿る。つながり形成の困難要因として、不確かという MS の疾患特性と社会の無理解が大きく影響を及ぼし、サポート資源の乏しさが浮き彫りとなった。

3 編の研究を通じて、第 1 に、人や社会との関係性が MS 病者の QOL の関連要因であることが明らかとなった。第 2 に、MS 病者の QOL 支援において、「家族」「人や社会とのつながり」が重要な要因であることが明確になった。第 3 に、MS 病者が望むつながりの特徴は、MS 専門医とのつながりをベースに，適度な距離感で相互承認を得られる重要他者とのつながりであることが解明された。

本研究結果の活用は、地域の保健医療福祉職の実践理論として、MS 病者の QOL 向上支援、特に社会生活を送るうえでのつながりに新たな視点を提供することになろう。

学位論文審査結果要旨	主査：看　護　学分野教授　安保寛明 副査：作業療法学分野教授　平山和美 副査：看　護　学分野教授　齋藤美華

新規性・有効性

多発性硬化症を有する人は国内でおよそ１万人いると推定されているが、確定診断がなされにくいこと、外観上の特徴がないことなどから他者の理解を得るまでに多くの障壁があると考えられている。このため、多発性硬化症の患者には社会的健康の向上に向けた援助が必要であるが、体系的な研究はなされてこなかった。この論文は看護学における知見の整理(研究１)、患者の主観的 QOL を造的に把握する尺度の実施可能性(研究2)、他者とのつながりを形成するプロセス(研究３)の３つの焦点によって体系的に記述されている。多発性硬化症を有する人の QOL と社会的健康度に注目した研究は例がなく、SEI-QOL-DW (個人の生活の質評価法)の活用により本人の考える価値の重みに着目した点で新規性が高い。また質的調査を並行して行うことで有効性が高い。

信頼性

この研究では 33 名の多発性硬化症患者の QOL について質的・量的に調査を行った。SEIQOL-DW はインタビューによる評価法であり準備や分析にも習熟と時間を要する方法であるが、33 名という人数に調査することで当事者が語る価値を平均や標準偏差等の数量的視点で分析し、家族や健康、人のつながりといった価値に重みがあることを明らかにした(研究２)。また、研究３ではプロセスの分析や記述において信憑性の高い分析法である M―GTA を用いた適切な分析過程を経て、多発性硬化症患者が周囲の人との間に感じうる遠慮や障壁の発生と心理的距離感の再構築への過程を語りの中から活き活きと記述した。

なお、文献研究を行った研究１も含めるとこれらの研究すべてが査読付き論文として発表済みまたは受理済みである。すなわち、本論文が多発性硬化症とともに生きる人の理解と援助に関する信頼性の高い研究であることは、当該学術領域からもすでに認められている。

総評

この研究は、他者から推察しにくい多発性硬化症とともに生きる人の価値観の順位や QOL に関連して想起される事項を明らかにしており、多発性硬化症を抱える人の認識を理解するうえで有効な知見であり、当該分野の発展に大きく貢献する研究である。

審査委員は、論文構成、背景の整理と問題設定、結果および考察、引用文献の適切性について慎重に検証し、博士論文として適切な水準に至っていることを確認した。また、口頭試問の際にも研究者が十分な論述をおこなった。本論文は博士論文に値する内容であると評価し、一致して学位論文審査及び最終試験に合格と判断した。